『徒然草』に見る無常観

高　平永（韓国人留学研究生）

一　序

『徒然草』は鎌倉時代（一一九二～一三三三）の出家遁世者吉田兼好の随筆集であり、平安時代の清少納言の『枕草子』（一〇〇〇）や、鎌倉時代初期の鴨長明『方丈記』（一二一二）と同じく、日本古典の随筆を代表する名作である。

吉田兼好は当代最高の知識人であり、仏教・儒教・道教ばかりでなく、有職故実についても多才多能な文化人であった。『徒然草』は仏教的な無常観を基底にした人生訓・処世観、人生の事象に限りない興味を表す複合的な性格を持つ随筆集である。

兼好の鋭い観察によって、この世は無常であるという実相を認識し、その認識に基づいて、無常であるこの世をどう生きるべきかを述べている。それは現代を生きているわれわれにも示唆を与える点が多いと思われる。

『徒然草』における吉田兼好の無常観と、兼好が勧めている生き方を考察することによって、無常思想と、中世において理想とされた生き方について、考えてみたいと思う。

二　無常思想の「世」認識

この世が無常であること、つまり「常でない」ことは、この随筆を貫く思想であるが、その代表的な段を考察する。まず「生」と「死」についての表現を見る。

第七段では、「世は定めなきこそいみじけれ」と、人間の寿命の不定を讃えている。「つくづくと一年を暮すほどだにも、こよなうのどけしや」として、一年を暮らす間でも、しみじみと暮らすならばゆったりすることができるが、その長い命を不足に思い、惜しいと思うならば、「千年を過すとも一夜の夢の心地こそせめ」と、そのはかなさを述べている。

人の寿命の不定という現実に立脚し、「もののあはれ」を基底にして、人間の生涯の意義をきわめて主観的、感情的に評し、「つくづくと一年を暮らす」生活に満足しようとする消極的、安住的生活態度を露呈している。

第三十段では、人間は死後に次第に忘れられて行くという、人間の生死のはかなさを時間的経過を追って叙述して

いる。人の死後、この世に残した痕跡が年月を経て消滅して行く哀しさを、冒頭で、「人の亡き跡ばかり悲しきはなし」と概括的に述べた後、「中陰のころ」「年月を経た後」「遠い過去となったころ」の三段階にわたって、人間の死が多くの人に与える印象や、遺骸を埋めた墳墓が変遷し、流転し、結局「無」となってしまう過程を、跡に残る人々の気持ちや墳墓の状況を写すことによって、具体化している。事実の描写が冷酷で、切実な調子で貫いているのは、兼好自身の体験との結びつきが緊密であるためだと思われる。

第四十段では、兼好が競馬見物に出かけ、その雑踏の中で、棟の木の股で居眠りする法師を見物衆が嘲る声を聞くや、「我らが生死の到来、ただ今にもやあらん。それを忘れて、物見て日を暮す、愚かなる事はなほまさりたるものを」と、わたしたちに死のやって来ることは、この今の瞬間であるかも知れないのに、それを忘れて競馬見物に日を過ごすというのは、木の上の法師よりも愚かなことは一層まさって甚だしいことだと、指摘している。また、「かほどの理、誰かは思ひよらざらん」として、生と死は近いことであって、生きているうちに、死は突然やって来ることを強調している。

第九十三段では、「人皆生を楽しまざるはなし。死を恐れざるにはあらず。死の近き事を忘るるなり」と、「死の近き事」を忘れて生きている愚かさを指摘している。

第百三十七段では、「都の中に多き人、死なざる日はあるべからず」と絶え間なく死んで行く様子を述べて、「若きにもよらず、思ひ懸けぬは死期なり」と、死は予測できないことを指摘している。また終わりの部分では「世を背ける草の庵には、閑かに水石をもてあそびて、これを余所に聞くと思へるは、いとはかなし。閑かなる山の奥、無常の敵競ひ来らざらんや。その死に臨める事、軍の陣に進めるに同じ」として、隠遁している草庵までも例外なく、必ずやって来るのが死であると、死の必然性を強調している。

今まで考察してきた諸段で述べていることは、「人間の死というものは、思いかけずにやって来るのであって、とうてい避けることのできない必然的な実相である」ということである。

続いて、死んでしまった故人と過ぎてしまった過去の懐かしさを述べている、第二十九段と第三十一段について考察する。

第二十九段では、初めに「静かに思へば、万に、過ぎにしかたの恋ひしさのみぞせんかたなき」と、過ぎ去ってしまった過去に対する懐かしさは、何とも我慢できないものであると述べて、後に「人静まりて後、長き夜のすさびに、何となき具足とりしたため、残し置かじと思ふ反古など破り棄つる中に、亡き人の手習ひ、絵かきすさびたるこそ、ただその折の心地すれ」と、長い秋の夜の寂しさに耽って、亡くなった人に対する懐かしさを素直に表現している。

第三十一段では、「この雪いかが見ると、一筆のたまはせ

ぬほどのひがひがしからん人の仰せらるる事、聞き入るべきかは。返すがへす口をしき御心なりと、言ひたりしこそ、をかしかりしか」と、自分を非難したのを実におもしろいと述べ、「今は亡き人なれば、かばかりのこと忘れがたし」と、今はこの世にいない亡き人の思い出に対する懐かしさを生きいきと表現している。

これまで考察してきたのは、生と死についてであるが、以下には、この世のあらゆる事象、人の心などすべてのことは変化するということを述べている段を考察する。

第二十五段では、「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、楽しび、悲しび行きかひて、はなやかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変らぬ住家は、人改まりぬ」と、すべては変化して滅びることの認識を述べ、その実相として京極殿や法成寺などがすっかり滅びてしまったことを例に上げている。

終わりの部分では、こんなにはかない世であるから、何事につけても、すべて自分の死後の遠い未来まで考えて処置しておくことは、実に頼みにならないということを、「されば、万に、見ざらん世までを思ひ掟てんこそはかなかるべけれ」と表現している。

第二十段では、「風も吹きあへずうつろふ人の心の花に、馴れにし年月を思へば、あはれと聞きし言の葉ごとに忘れぬものから、我が世の外になりゆくならひこそ、亡き人の別れよりもまさりてかなしきものなれ」と、人の心の移り変わりやすさを、風に吹かれて散りやすい花にたとえて述べている。自己の心情に即して、過去の恋愛の経験を回想し、昔の恋人から聞いた言葉を忘れていないにもかかわらず、その恋人が自分から離れて遠いものになって行くという世の中の例は、故人との死別よりも真に一層悲しいものであると、離別の悲しみを嘆いている。

第九十一段では、赤舌日を忌む迷信の愚かさを指摘し、その愚かなゆえんを無常変易の理に基づいて論破している。世上の迷信を打ち破るのに、現実そのままでなく、深く現実の根底に立ち入り、そこに見いだされる一切の事物の、常でなく、変遷する理法に基づいて批判している。「一切の事物の、常でなく変遷する」という無常の現実についての諦観は、「志は遂げず。望みは絶えず。人の心は不定なり。物皆幻化なり」という言葉によく表れている。

そして、兼好は、そういう現実の無常・幻化の相に即して「吉凶は、人によりて、日によらず」と結論している。この段の「人の心不定なり」は、第百八十九段に発展し、「何事か暫くも住する」は、第百五十五段・第二百四十一段に進展して、この段以上の思想の深さを示している。

第百八十九段では、第九十一段の「人の心不定なり」を受けて、「今日はその事をなさんと思へど、あらぬ急ぎ先づ出で来て紛れ暮し、待つ人は障りありて、頼めぬ人は来たり」と、人間の社会的生活がいかに動揺不定の相を示しているか、それにはいかに対処すべきかを論じている。

前の段落では、いかに人間の生活が思い通りに行かぬものであるかを、一日の上に反省して、この一日のことを一年にも、また一生にも拡張して、様々な事実と、それが引き起こす人の心の諸相とが常に変転極まりなきことを強調している。

後の段落では、不定の相をさらに拡大し、発展させて、「予てのあらまし、皆違ひ行くかと思ふに」と、前段を総括した上で、「おのづから、違はぬ事もあれば、いよいよ物は定め難し」という、総合的立場に進み、「不定と心得るのみ、実にて違はず」という結論に達している。

即ちこの段では、人事的交渉の定め難く、頼み難いことを、経験的、日常的にとらえていて、それに処する一般的態度としては「不定と心得るのみ、実にして違はず」という一種の処世的態度を述べている。

第百八十九段の「何事か暫くも住する」を受けて発展させているのが、第百五十五段ということができる。第百五十五段では、前の段落で「世に従はん人、先づ機嫌を知るべし」と主張しながら、その機嫌にかかわりなく直ちに実現する、生、住、異、滅の四相を挙げ、「必ず果たし遂げんと思はんこと」は、「機嫌」を言わずに、その実行・実現に努めるべきことを強調している。つまり、世間に順応するための「機嫌」と、それにかかわらぬ「実の大事」が述べられている。しかし「実の大事」について、「真」と「俗」とが共通の問題として取り上げられているのは、注目すべき点である。

この段では、四相の変遷、生滅の無常相の認識に立って、「生・老・病・死」のいわゆる四苦を挙げ、その中から特に「死」を取り上げて、それが「序を待たず」「覚えずして来る」ことを明言している。

即ち、生が終わって死が来るのではない。生の中に死が内在し、それが無意識のうちに展開を遂げ、実現して行くというのである。兼好の現実認識は単に事実を把捉するためではなく、深く自己の生き方を確立するためであった。兼好の、宇宙・人生の実相を無常なりとする世界観、それに基づく実践的工夫や態度は何度も繰り返し述べられたが、この段では、無常の実相そのものに肉迫し、自己の世界観を確証している。

その中には第一段落におけるように、世俗における「機嫌」の重視と、それを超えた「生・住・異・滅の移り変わる実の大事」の厳存することがとらえられている。また第二段落では、無常の、一切の事物を消滅させ否定する面と、生起させ肯定する他の面とが、四季の変遷や木の葉の落ちる現象の上に考えられている。そして、四季の変遷に認められる「序」と、それと違った突如の「死」の到来とが、即ち、定と不定とが対照的にとらえられていることも、兼好の無常思想の特質である。そういう定と不定、常と無常とを含む彼の世界観の幅の広さと深さを確立し、しかも、真と俗とにおける、なすべき実践への覚悟・意欲を促して

いるところに、この段が第百三十七段を受けて、それを発展させていることが指摘できるであろう。

今まで、無常である世の中の実相として、生と死、この世、人の心、この世の事象などの変化について考察して来たが、兼好は無常の実相として、財産についても何度も述べている。

第十段では、前の部分では、「家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ」と、住む人に似つかわしい住居は興趣あるものとして表現しているが、後の部分では、多くの大工が工夫の限りを凝らして立派に飾り立て、珍奇な道具類をたくさん並べて置き、庭園の草木までもその自然な趣をなくすように手を加えて作り上げた邸宅は、「見る目も苦しく、いとわびし」と否定している。どんなにぜいたくに建築しても、一時の間に焼け失せてしまうはかないものだというのである。

第十八段では、まず「人は、己れをつづまやかにし、奢りを退けて、財を持たず、世を貪らざらんぞ、いみじかるべき」と、財産を持たないで、世間の名誉や利益をむやみに欲しがらない、簡素な生活のすばらしさを唱えて、それを許由と孫晨の生活ぶりを実例に表現している。許由の、簡素以上、節倹以上の無一物に徹している生活ぶりに感嘆して、それに憧憬を感じているのである。また、中国と日本との国民性を比較して、日本民族の歴史において、かかる境地に達した者を語り伝えていない事実を指摘し、それを嘆くことによって、兼好の憧憬の心をもっと鮮やかに表したと思われる。

第三十八段では、冒頭で、「名利に使はれて、閑かなる暇なく、一生を苦しむるこそ、愚かなれ」と、人間の生の意義を「閑なる暇」に認め、それを批判の基準としている。その基準で、利から名へ、名から官・位へ、さらに知徳そのものにまで批判を加えて行く、整然たる論理的構想を示している。

名誉・利益のような世俗的価値に対するこのような批判は、古来からの仏教的、儒教的、老荘的な、東洋の精神的伝統に拠ると思われる。その精神的伝統によって「万事は皆非なり。言ふに足らず、願ふにたらず」として世間的価値の一切を否定する結論を述べているのである。

第七十四段では、前半で、生を貪り、利を求めて止む時なく、働き勤める人間の姿を冷酷に描き、後半では、老いと死との迅速な到来に対する人間の無自覚さを指摘している。「身を養ひて、何事をか待つ。期する処、ただ、老と死とにあり」と、待っているのは老と死である、はかないこの世であることを述べて、「愚かなる人は、またこれを悲しぶ。常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり」と、愚かな人が老いと死の来ることを悲しむのは、一切の事物が変化してやまないという理法を覚っていないからだと述べ、老いと死に対する自覚を強調している。

第百四十段では、始めに「身死して財残る事は、智者の

せざる処なり」と、人が死後に財宝を残すことは愚かな行為であることを指摘し、その蓄財の心理を抉り出し、さらに進んで、残された財宝をめぐる争いにも言及した後、「後は誰にと志す物あらば、生けらんうちにぞ譲るべき」と述べているのは、世の無常を悟った兼好にとっては、当然なすべき生前の務めと言うことができよう。

以上のような批評から導き出されたのが、終わりの「生活の原理」であって、持つべきは生活上の最低度の必要品に限り、その外は所有しないのを理想とするというのである。

第二百十七段では、大福長者の主張に内在している自己矛盾を明らかにすることによって、大欲は無欲であるし、財産は不要・不用であることを述べている。長者は無限の欲望と有限の財とを対置し、欲望の否定によって財の増大を計ろうとしている。ところが兼好は、その財は手段であって、目的は欲望の満足にほかならないことから、長者が蓄財を目的として欲望を否定し、銭を使わないのは、そこに欲望の満足という「楽しび」がなくなってしまい、ちょうど欲望はあっても財がないために、欲望を満足させ得ない貧者に「楽しび」がないのと同じ状態であると言うのである。つまり、長者の言葉の終わりにある、「銭積もりて尽きざる時は、宴飲・音色を事とせず、居所を飾らず、所願を成さざれども、心とこしなへに安く、楽し」というのは、「全く貧者と同じ」状態だというのである。

即ち、富者が、蓄財があっても欲望を抑えて使わずにいるのと、貧者が欲望があっても財がなくて満足しないでいるのとは、同等だというわけである。

第八十二段、第八十三段、第二百四十一段では、すべてのことは完全に出来上がった時にすぐに滅びてしまう無常のことだから、足りない面があるのがよいと述べている。

第八十二段では、「すべて、何も皆、事のととのほりたるは、あしき事なり。し残したるをさて置きたるは、面白く、生き延ぶるわざなり」と、何事もやり残したことをそのままにしておいてあるのは興趣があって、そのものの生命が将来にまで延びて行くやり方だと述べている。未完成の状態にして置くことが、未完成なるが故に、将来において完成されるための生命の延長を感じさせるというのである。

第八十三段では、大政大臣昇進の望みを持たなかった西園寺公衡と藤原実泰の二人の言葉を挙げて、「万の事、先の詰まりたるは、破れに近き道なり」と述べている。第八十二段では、器物・建築・著述の不備、不完全に価値を見いだしているのに対して、この段では、人間の欲望が最高に達することの危険を指摘している点に、前段よりも発展した内容が認められる。

第二百四十一段では、「望月の円かなる事は、暫くも住せず、やがて欠けぬ」と完全に出来上がったら、すぐに滅びてしまう無常を述べている。

三　無常なるこの世の生き方

今までに考察してきた段々では、この世の無常であることが述べられていた。これからは、無常であるこの世を乗り越える知恵として兼好が勧めている諸段について考察する。

兼好は限りのある無常なるこの世の悩みから脱出するためには、仏教に帰依することを提言している。仏教に帰依するためにすべてを棄てることを勧め、すべてを棄てた世捨人の理想的な生活ぶりを述べることによって、無常なるこの世における人間の望ましい生き方を提示している。

まず仏教に帰依することを勧めている段を考察する。

第四段では、「後の世の事、心に忘れず、仏の道うとからぬ、心にくし」と、仏の教えに親しむ平静な境涯に対する憧憬を示している。

第十七段では、「山寺にかきこもりて、仏に仕うまつるこそ、つれづれもなく、心のにごりもきよまる心地すれ」と、山中の寺に参籠して、そこのみ仏に勤行をすることが、無常なるこの世に対する執着・欲望・煩悩から脱する道であることを述べている。

人生の有限性を認めて、死後の世で永遠を求めるために、み仏に勤行しながら生活すべきことを強調しているのである。

(1)仏教への帰依

第三十九段では、法然上人の言葉を引用して、念仏の重要性を述べている。「往生は、一定と思へば一定、不平と思へば不定なり」と、往生に対する信念の重要性を述べて、次に「疑ひながらも、念仏すれば、往生す」と、念仏の重要性を強調している。即ち、念仏することによって永遠の極楽に往生できると、信念を持って念仏すべきことを述べている。

第四十九段は、兼好の仏道精進の覚悟を示したものとして、注目すべき段である。

まず、「老来たりて、始めて道を行ぜんと待つことなかれ。古き墳、多くはこれ少年の人なり」と、人はいつ死ぬか分からないのであるから、歳を取ってから仏道を修行しようと待ってはならないと述べている。次に「人は、ただ、無常の身に迫りぬる事を心にひしとかけて、束の間も忘るまじきなり。さらば、などか、この世の濁りも薄く、仏道を勤むる心もまめやかならざらん」と、人間は、無常、即ち死がわが身に迫っていることを、心中にしっかり保持して、この現世に執着する邪念を捨てて、仏道に精進努力する心持ちを述べている。

終わりに、「『今、火急の事ありて、既に朝夕に逼れり』とて耳をふたぎて念仏して、つひに往生を遂げけり」と、死が身に迫っているという心持ちで、邪念を捨てて念仏す

ることによって往生を遂げた高徳の僧の話を述べることによって、念仏の重要性を強調している。

第五十九段では、無常観に立脚して、諸縁放下の覚悟を在俗の読者に向かって力強く説き示している。冒頭で、「大事を思ひ立たん人は、去り難く、心にかからん事の本意を遂げずして、さながら捨つべきなり」と、出家入道しようとする人はすべてを捨て去るべきことを力説している。次に世俗の用事にとらわれて、なかなか一切を捨てきれぬ人間の有様を示した後、それにもかかわらず、無常（死）の到来には、一切を捨てきらねばならぬ必要性を「命は人を待つものかは。無常の来る事は、水火の攻むるよりも速やかに、遁れ難きものを。その時、老いたる親、いときなき子、君の恩、人の人情捨て難しとて捨てざらんや」と強調している。

第九十八段では、『一言芳談』という本を読んで、心にかない感銘を受けたことを述べることによって、仏道に入って生きることを望む人の心得と生活態度を説いている。「仏道を願ふといふは、別の事なし。暇ある身になりて、世の事を心にかけぬを、第一の道とす」ということを上げ、その人の生活態度としては、「後世を思はん者は、糀汰瓶一つも持つまじきことなり。持経・本尊に至るまで、よき物を持つ、よしなき事なり」と、「遁世者は、なきにことかけぬやうに計らひて過ぐる、最上のやうにてあるなり」と挙げて、無一物・無所有の簡素な生活を勧めているのである。

第二百四十一段では、「望月の円かなることは、暫くも住せず、やがて欠けぬ」、「死期既に近し」と無常なこの世の実相を上げて「直ちに万事を放下して道に向かふ時、障りなく、所作なくて、心身永く閑かなり」と仏道への強く激しい要求を表現している。

この段の構造は、所願を放下して、仏道に精進することによって、心身の閑静に至るという『徒然草』における無常思想に徹した生き方を説明している。

(2)所願の放下

仏道に精進することの前提条件とも言える所願の放下を示す段について考察する。

第百十二段では、まず、「年もやうやう闌け、病にもまつはれ、況んや世をも遁れたらん人」は、「他の事を聞き入れず、人の愁へ・喜びをも問はず」と言い、世間の儀礼・習慣を無視して生きるべきゆえんを主張し、次に、それを自己の生き方の問題として取り上げ、「諸縁を放下すべき時なり」と断じて「信」や「礼儀」をも否定して生きる道を高唱している。

諸縁放下の目標は、「願ひも多く、身も苦しく、心の暇もなく、一生は雑事の小節にさへられて、空しく暮れなん」という自覚によって、「身も苦しく、心の暇もなく」の反対である「身の安く、心の暇ある」境地に入るためであると考えられる。

第百六十六段では、人間世界における「営み合へるわざ」のいかにはかなく、人間の生命もまたいかにはかなく滅び去って行くかを述べている。まず「春の日に雪仏を作りて、そのために金銀・珠玉の飾りを営み、堂を建てんとするに似たり」と、人間の営みが、雪の溶けやすい春の日のもとで、雪仏を作ってそれに金銀や珠玉を装飾してお堂を建立しようとしてもできないように、はかないことだと述べている。その後に「人の命ありと見るほども、下より消ゆること雪のごとくなる」と、人間の生命を「雪仏」に比喩して、人間の生命も根底から次第に消滅し、死に近づいて行くことは、はかないことだと言う。

即ち、生命自身が絶えず自己消滅、自己崩壊を続けているという存在のはかなさを表現しているのである。

第百八十八段では、前の部分で、目前のことばかりに紛れて月日を送り、何らなすことなく老いてしまう世人の様を批判する具体例を挙げて、終わりの部分で「一事を必ずなさんと思はば、他の事の破るることをも傷むべからず、人の嘲りをも恥づべからず。万事に換へずしては、一の大事成るべからず」と、世間の常識見を大胆に否定して、「われいかに生きるべきか」という意志を追究している。即ち、諸縁放下による仏道への精進を強く主張しているのである。

これは第百十二段の後の段落に強調されている諸縁放下の意志とよく一致しているが、本段は前段の趣旨を止揚的、発展的に述べる立場に立っていると思われる。

この段に挙げられている四つの例は、いずれも適切で、彼の信念・主張をよく深刻に具体化しているが、それも長い間この問題に沈潜し、その立場から世間の事象を観察し、批判したことの結実であると思われる。

第二百十一段では、兼好が自分の生活経験に即して、「いかに生きるべきか」について、強い自己確立の意志を述べていると思われる。第一段落で「万の事は頼むべからず」と冒頭に道破して、その頼むべからざる例を八条列挙して、いかに現実の頼むべからざるかを指摘した後、第二段落では、「身をも人をも頼まざれば」と要約し、そういう現実に対処する態度としては、心を「緩くして柔か」に用いるべきことを強調している。

それは「是なる時は喜び、非なる時は恨みず」という、現実の流れに足を没してしまわずに、自己をそれよりもう一歩高く保持する生き方の根底として見いだされる態度、立場である。

第三段階では「人の生」を規定するものとして、「天地」を説き、天地の無限性に随順して生きることが、「寛大にして極まらざる」態度であり、そうすることによって現実の喜怒を超越し、煩いから脱し得ることを述べている。即ち、第一段落で現実の頼むべからざるゆえんを述べてから、第二段落ではそれに処する心の用い方に進み、第三段落では、さらにその「心」の根底を「天地」に見いだして、それに随うべきことを主張するというように、現実の諦観から、

それに処する立場へ、さらにその根拠となる原理へと、次第に深まって行く論理的な叙述によって、「すべてはあてにならない」ことを述べている。

第六段の「子といふものなくてありなん」という子孫否定の表現も、「すべてはあてにならない」という認識を、改めて述べたものだと思われる。

(3)世捨人の生活

ここでは、兼好が『徒然草』の中で、一貫して主張して来た、諸縁放下して仏道に精進することによって得られるという、理想的な生き方である「世捨人の生活」について考察する。

第五段では、官位昇進の望みを失った世捨人の、困窮し、落魄した生活を取り上げ、特に、その「待つこともなく明し暮したる」生活を「さるかたにあらまほし」と感じ入っているのである。これは、「世間的地位や栄達への願い」から解放された、そういう意味で心の束縛から超越した自由な境涯に対する兼好の憧れの表現であろう。

顕基の言葉が引かれているのも、世間的栄達や名利の絆から解放された、自由で高朗な心境における、天上の月を望み見る生活に憧れたことに、兼好が同感したからだと思われる。

兼好自身も、三十歳前後の前途ある身空で、官途を辞して遁世したのであるから、我が身につまされて、こういう零落貴族の生活に同感するところがあったと思われる。

第二十段では、世捨人が「この世のほだし持ちたらぬ身に、ただ、空の名残のみぞ惜しき」と言ったのを、「まことに、さも覚えぬべけれ」と、同感を示すことによって、そのような生活に対する憧れを表現したものである。即ち、何の面倒もない世捨人として、空から受けた心に残る感銘ばかりが捨て難いという、優雅で理想的な生活に対する憧れの表現である。

第五十八段では、「人と生れたらんしるしには、いかにもして世を遁れんことこそ、あらまほしけれ。偏へに貪る事をつとめて、菩堤に趣かざらんは、万の畜類に変る所あるまじくや」と、仏道への帰依を強く勧めて、人として世を逃れるのが理想であることを主張している。「道心あらば、住む所にしもよらじ」と、仏教に帰依しようと思えば、どこにいても修行できるから、住む所には関係ないという人に対して、「さらに後世を知らぬ人なり」と否定して、「心は縁にひかれて移るものなれば、閑ならでは道は行じ難し」と、遁世の必然性を強調している。

第七十五段では、まず「つれづれわぶる人は、いかなる心ならん。まぎるる方なく、ただひとりあるのみこそよけれ」と、世間の人の「つれづれわぶる」常識的見解を否定して「まぎるる方なく、ただひとりある」境地を積極的に肯定している。次の段落では、そういう境地から、世人が世間に順応することによって、いかに自己の本心を喪失し

ているかを「世に従へば、心、外の塵に奪はれて惑ひ易く、人に交れば、言葉、よその聞きに随ひて、さながら心にあらず」と批判して、また「分別みだりに起りて、得失止む時なし。惑ひの上に酔へり。酔の中に夢をなす。走りて急がはしく、ほれて忘れたる事、人皆かくの如し」と、世人のすべてが損得を思う心を絶え間なく動かし、身は夢中に走りまわり、心はぼんやりと自己を忘れているのを批判している。このように、この世の人間の生活の望ましくない点を述べてから、終わりの段落で「未だまことの道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心を安くせんこそ、しばらく楽しぶとも言ひつべけれ」と、「未だまことの道を知ら」ざる人、即ち世間の人一般にも、「縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心を安く」することが、「しばらく楽しぶ」ことになると説明している。身と心の安定こそ自己を確立する道であることを示唆して、そのためには、世間の「縁」や「事」から離れて「ひとりある」ことが必要であると、世捨人のよさを主張しているわけである。

第七十六段では、「聖法師」を直接対象として取り上げ、「世の覚え花やかなるあたりに」「人多く行きとぶらふ」中に交じって、「言ひ入れ、たたず」んでいる様子を、「さらずともと見ゆれ」と否定している。

「法師」の身になることは、本質的に俗世間的生活を捨て去り、俗生活以上の価値を求めることにある。それなのに、いったん出家した身でありながら、なお権勢家の吉凶事に関心を示している様子を、兼好としては認めるわけにはいかなかったのである。

第七十五段では、世俗の人一般を「人皆かくの如し」と対象としているのに対し、ここでは「聖法師」だけを特に取り立てて、法師の生き方が、一般の人と違うべきゆえんを述べている。

第百二十四段では、「安らかに世を過ごす」是法法師の様子を「いとあらまほし」と理想化し、その境地への憧れを表現している。しかも是法法師の「浄土宗に恥ぢずといへども、学匠を立てず」とあるように、世間的名声を超越し、「ただ明暮念仏して」仏道に一体になっている様子を、世捨人の理想的な生活ぶりであると述べている。

四　結び

吉田兼好は『徒然草』で、この世の無常であることを多くの段で例を挙げながら説明している。生と死、なき人の思い出、変化（あらゆることの常ならぬこと）について述べ、財産などは永久性のないつまらないものと断定している。またあらゆるものは満ちた時に直ちに滅びるという認識に立って、何ものも「足りない」面があるのが良いとしている。

自然物に限らず、人間の生と死、財産と名誉など、この世のすべての事象に対する的確で鋭い観察によって、この

世は無常であるという実相の認識に至り、そのような認識の上で、望ましい生き方として、出家遁世することを勧めている。即ちこの世のあらゆる「縁」や「事」から離れきってしまうことを勧めているのである。

諸縁を捨てた世捨人の生活を理想的な生き方だとする兼好の主張に共感できるのは、遁世したことのある彼の経験に基づいた、現実性ある主張であるからだと考えられる。

一番理想的な生き方として勧めているのは、諸縁から離れて仏教に精進する法師の生活であるが、「未だまことの道を知らずとも、縁を離れて身を閑かにし、事にあづからずして心を安くせんこそ、しばらく楽しぶとも言ひつべけれ」と、世間の人一般にも、この世の諸縁から離れた生活が良いことを述べている。即ち身と心の安定こそ、自己を確立する道であると示唆している。

この世の無常であることを悟って、諸縁を捨てて遁世すべきだという。このような兼好の無常観は、一種の社会現実からの逃避であるという批判もあり得るが、名利に追われてあくせくしながら生活している現代に生きるわれわれにとっても、参考にすべき教訓を持った思想であると思われる。

（指導　浮橋康彦教授）